



アイランドピークの登頂を終えた真さん(写真中央)



カカボラジに挑む尾崎さんファミリー

▲家族とともにヒマラヤ登山

尾崎さんは、1983(昭和58)年に、ネパールの首都カトマンズのフランス大使館に勤めるフランス人のフレデリックさんと登山を通じて知り合い結婚。

翌年に長男の真さんが誕生し、「家族みんなで楽しく時間を過ごすには、登山が一番」という思いが、尾崎さんの中で膨らみます。

そんな思いを抱きつつ、1985(昭和60)年、フレデリックさんと当時1歳になる真さんとともに、ヒマラヤのアイランドピーク(6,189m)の登頂に成功。大きな話題となりました。

▲幻の山、カカボラジ

その後も登山や冒険を続ける尾崎さんファミリー。今度は、誰も見たことがなく、登ったことがないミャンマーの最高峰「カカボラジ(5,881m)」に、長女の沙羅さんも加えた家族4人で挑みます。ミャンマーの政情不安で登山許可がなかなか下りない上、亜熱帯雨林の深いジャングルと険しい峡谷は、尾崎さんにとってエベレストより難しい山となりました。それでも、ベースキャンプまで家族が同行し、尾崎さんをバックアップ。ついに、1996(平成8)年、計画から3年越しで登頂に成功しました。

そして、1997(平成9)年に「第1回植村直己冒険賞」を受賞。カカボラジの登頂によって、冒険家の故植村直己さんの志であるパイオニア精神を受け継いだことが認められたのです。実は、植村さんとは19歳のときにフランスで10日間ほど自転車に乗って2人で旅した仲。登山家としての大きな支えとして、植村さんの存在があったそうです。

▲家族から見た尾崎さん

大自然をフィールドに、世界的な登山家として活躍した尾崎さん。家族にとって、尾崎さんはどんな父であり、夫だったのでしょうか。

沙羅さん

「いっぱいいい思い出をつくってもらって、一緒にいるのが楽しかった。本当に強い人で素晴らしい父でした」

真さん

「父と一緒に新しい挑戦や冒険をすることが楽しみでした。普段行くことができない場所に行ったり、見ることができないことをいっぱい見せてくれました」

フレデリックさん

「限りない情熱のある人で、いろんな挑戦をしてきました。本当は寒さが好きじゃないし、高さが好きじゃないし、自分が好きじゃないことの反対のことをやってきた人。でも、そうすることが大好きな人で、いつも輝いていました」



尾崎さんの思い出を語るフレデリックさん、真さん、沙羅さん(写真左から)

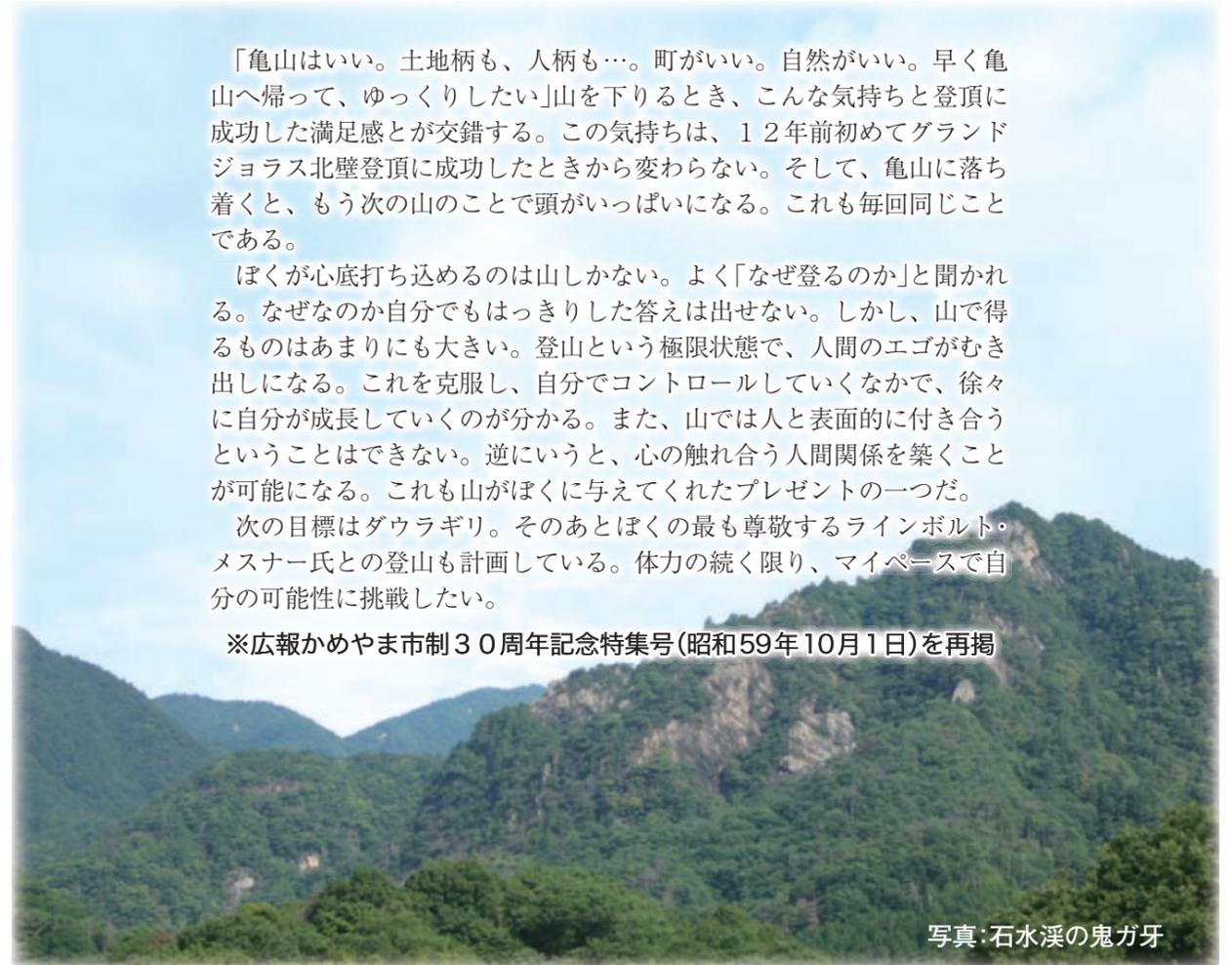


写真:石水溪の鬼ガ牙

「亀山はいい。土地柄も、人柄も…。町がいい。自然がいい。早く亀山へ帰って、ゆっくりしたい」山を下りるとき、こんな気持ちと登頂に成功した満足感が交錯する。この気持ちは、12年前初めてグランドジョラス北壁登頂に成功したときから変わらない。そして、亀山に落ち着くと、もう次の山のことで頭がいっぱいになる。これも毎回同じことである。

ほくが心底打ち込めるのは山しかない。よく「なぜ登るのか」と聞かれる。なぜなのか自分でもはっきりした答えは出せない。しかし、山で得るものはあまりにも大きい。登山という極限状態で、人間のエゴがむき出しになる。これを克服し、自分でコントロールしていくなかで、徐々に自分が成長していくのが分かる。また、山では人と表面的に付き合うということとはできない。逆にいうと、心の触れ合う人間関係を築くことが可能になる。これも山がほくに与えてくれたプレゼントの一つだ。

次の目標はダウラギリ。そのあとほくの最も尊敬するラインボルト・メスナー氏との登山も計画している。体力の続く限り、マイペースで自分の可能性に挑戦したい。

※広報かめやま市制30周年記念特集号(昭和59年10月1日)を再掲



何よりも家族を愛し、山を愛し、亀山を愛し、そして、たくさんの人たちから愛されていた尾崎隆さん。心よりご冥福をお祈りいたします。

- 写真出典 ヒマラヤの子守傘—一歳児を連れて(河出書房新社)
- 参考文献 果てしなき山行(中央公論社)
- ヒマラヤの子守傘—一歳児を連れて(河出書房新社)
- 幻の山、カカボラジ(山と溪谷社)

尾崎隆さんに関する情報をお寄せください

尾崎隆さんの同級生(亀山東小学校・亀山中学校)が中心となって、今年の秋、尾崎隆さんをしのぶ会を開催しようと準備を進めています。

小・中学校の時の文集や写真、思い出の品など、尾崎隆さんに関する情報をお寄せください。

問合せ 「尾崎隆しのぶ会」事務局(森中 ☎82-1788)

